

「親になること」再考 子育ての生態学序説

中京大学心理学部 小島 康生

Rethinking the "transition to parenthood": adaptation of an ecological perspective on childrearing
KOJIMA, Yasuo (School of Psychology, Chukyo University)

Since the 1980s, developmental researchers have examined adjustment during the transition to parenthood from a variety of perspectives. This paper suggests the significance of an ecological perspective in understanding the transition to parenthood. The first part of the paper emphasizes the importance of changes in the physical and social circumstances in understanding human development. The next part discusses the changes in their physical and social circumstances of first-time mothers during the transition to parenthood, referring to the findings of studies conducted by the author over the past several years. The last part of the paper proposes an overlap-differentiation model for the developmental niches of parents and children based on the theory by Super and Harkness (1986).

Key words: transition to parenthood, ecological perspective, physical and social circumstances, developmental niches

1. はじめに

人間の心の機序の解明をめざした心理学は、当初、自然科学の手法を下敷きに、人間の行動を刺激 反応の図式でとらえることに腐心した。その前提には、「心は個体の内部に厳然として存在する」という二元論的な考えがあり、外部からの刺激に対する反応、それも目で見て確認することが可能な「行動」を記述することこそ、心を客観的に理解する最善の手段だと考えられたのであった。

こうした伝統的な考え方に異を唱えた人物の一人が、第二次大戦中、航空部隊の乗組員選抜や育成に資する基礎データの収集に力を注ぎ、のちに知覚研究の領域に多大な影響を及ぼしたジェームズ・ギブソンであった。彼は、卓抜した直観に基づく理論の整備とその証左となる実証データの収集を重ね、知覚は個体と環境が織りなす相補的な関係を基盤に成り立つという、従来の二元論的な考えに真っ向から対立する斬新なアイデアを提唱した (Gibson, 1979 古崎・古崎・辻・村瀬訳 1986)。

同様の考えは、社会科学の分野においても広がっていた。ゲシュタルト心理学の発想を社会心理学に応用したとされるクルト・レヴィンや、レヴィンの同僚であるロジャー・パーカー、ハーパート・ライトなどの指摘がそれにあたる。彼らは、実験室下での人間の行動の測定や分析に比重を置いた従来の心

理学に疑問を呈し、自然な環境のもとで人間が他者と繰り返し広げる相互作用を記述する、生態学的な人間理解のアプローチを提唱した (このあたりの事情は、Wicker, 1979 安藤監訳 1994 に詳しい)。

本稿は、以上のような発想にヒントを得て、近年、発達心理学の領域でデータの蓄積が進んでいる「親発達」の分野に焦点化し、「親であること」を、その人を取りまく環境との交わりにおいて理解しようとするものの可能性を論じる。

本論を進めるにあたって、次の2つの項ではまず、われわれ人間を取りまく生活世界のそもそものなりたちや、成長・発達にともなう変化について一般的な傾向をまとめておきたい。筆者はこれを「生活・生態学的な視点からの人間発達理解」と位置付けたい。

2. われわれの生活世界

われわれの祖先が現生人類につながる独自の進化の道を歩みはじめたころ、彼らを取りまく生活世界はきわめて単純なものであった。定住化が進むまでは家屋などもちろなかったし、使われていた道具も限られていたであろう。翻っていま、われわれは、限りなく機能的な都市社会という構造の中に生きている。数百万年前の祖先には想像もつかない世界であろう。

例えば、筆者がいまこの原稿を書いているファミリーレストランの窓外には、周到な都市計画に基づいて舗装された車道と歩道、それに沿って林立するマンションやショッピングセンター、病院、ガソリンスタンド、飲食店などが軒をつらねる。そして、そうした世界を当然のものとし、われわれは毎日を送っている。気の遠くなるような長い歴史的・文化的所産である、この街にわれわれは生まれ、育ち、そして次の世代を育てていくのである。

日本をはじめ先進諸国では、交通手段もひととき発達している。そのため、ある場所から別の場所へ移動するには、通常、複数の選択肢がある。近所の公園に行くのなら徒歩で十分だが、そのついでにスーパーに立ち寄るなら自転車のほうが適当かもしれない。郊外のショッピングセンターへ出かけるには自動車が必要だし、通勤は、交通渋滞に巻き込まれなくて済む公共の交通機関が便利だろう。

同じことは、身の回りにあるモノや道具についても言えよう。われわれの生活は、言うまでもなく多くのモノを前提に成り立っている。いま筆者は、パソコンや携帯電話、書類、本、机、いす、マグカップ、カバン、傘など、数えあげればきりがなほどのモノに囲まれている。身に付けている衣服や靴、メガネも、それらがなければ生活が成り立たない必需品である。快適で安全な生活が送れるのは、モノの助けがあるからにほかならない。

そして、こうしたたくさんのモノのどれを利用するかは、時々刻々と変化する状況や文脈に応じて変化する。どこへ出かけるのか、誰と一緒になのか、その日の天候はどうか、どのような地域に暮らしているのか（町の中心部なのか郊外なのか）、そういった無数の変数に照らし合わせて、われわれは適宜、必要なモノを手に入れたり手放したりしていると言えよう。

3. 発達の人生移行に伴う生活世界の変化

本題に入る前に、もう一点、確認しておきたいことがある。それは、われわれの日常を取りまく世界の見え方や切り取られ方は、その人の発達の状況とともに変化するという事実である。われわれの人生は、一般的に、一定の発達の経路に沿って進んでいく。しかもそれは、幼稚園への入園、小・中学校への入学など「年齢」という枠組みに強く制約されている。

では、「人生の節目」とも言える、このような出来事によって、われわれの生活世界はどのように変わるだろうか。一般に、人生に起こるこの種の出来事は「人生移行」と呼ばれ、ある種の適応が求められることから、危機的な状況に陥ることが多い（山本、1992）。この移行には、先述した例に代表されるように、発達の意味合いを強く持つものから、そうでないもの（失業、転居など。「環境移行」と呼ばれる）までであるが、さしあたってここでは、発達の人生移行に注目したい。

場所

たいていの人にとって、日常生活世界は住まい（家）を中心としている。家を中心に、公園、学校、病院、役所、職場、スーパー、駅、飲食店などさまざまな場所を往来しながら、人は毎日の生活を営んでいる。

では、われわれが実際に行き来する場所は、発達に伴ってどのように変化していくだろうか。さしあたって、幼稚園児の生活世界について考えてみよう。この時期の子どもの場合、家を拠点に、幼稚園、公園、スーパー、習い事、（近くにあれば）祖父母の家、かかりつけの病院などが生活世界を形づくっているだろう。また、ある場所から別の場所へ移動するタイミングや移動手段は、たいてい親の意向に基づいているだろう。

小学生だとどうか。とりわけ「小学校」という場合は、それまでの生活世界と質的に大きく異なることもあって（菊池、2008）、昨今、話題の「小1プロブレム」の背景にもなる（長谷部、2004）。入学した子どもは、机といすが整然と並んだ教室、音楽室、図工室、図書室、体育館など特殊化の進んだ空間、そして時間割、授業と休憩の規則的な繰り返しなど、それまでに経験したことのない場へと待たなして送り込まれることになる。

活動範囲もまた、小学生になると大きく広がる。自転車は活動範囲の物理的な広がりを生むだろうし、家からかなり遠くまで友達と遊びに出かけることもあるだろう。当然のことながら、子どもの所在をいつでも親が把握しているわけでもなくなる。

大学生になるとどうだろう。家で過ごす時間はいつそう少なくなり、行き来する場所も多様化・複雑化する。アルバイトに多くの時間を費やすようになり、自分で稼いだお金で友達と旅行に出かけることもあるだろう。カラオケボックスやマンガ喫茶などもた

びたび利用するかもしれない。そして、これらのこととは反対に、子どもは、毎日のように過ごした公園には滅多に出かけなくなり、家族とよく出かけた動物園に足を運ぶこともほとんどなくなる。

モノ

われわれの生活世界に広がるモノも、発達に応じて変化していく。例えば、子どもが幼稚園に入園する時、親は、制服、上靴、かばん、弁当箱、給食袋など、幼稚園に必要なモノをひと通りそろえるだろう。小学生には小学生なりのモノ（ランドセル、習字道具、体操服、分度器……）が必要となり、入学を機に与えられた自分の部屋には学習机も必要になるだろう。一般的に、子どもの成長と連動して、親は適宜その時期に必要なモノを買いそろえ、子どもの物理的環境の充実を図っているといえよう。

しかも、モノに関しても、場所の広がりと同様、子どもの年齢が小さい時ほどその導入や配置に親が多く力を注ぐことは、ぜひとも指摘しておかねばならない。もちろん、場所の広がりがある程度、段階的に進んでいくのに比べれば、モノの導入の変化はやや緩やかで連続的だと言えるかもしれない。例えば、親の選んだ服を着るのか、子どもが自分で服を選ぶのかは、小学校への入学を機にがらりと変わるというようなものではない。

ひと

ひととの関わりについても同じ構図が当てはまる。発達初期には、子どもが接する他者はほぼ家族に集中するが、親が育児サークルのような場所へ子どもを連れだすようになれば、そこにいる人々（大人や子ども）とのつながりが生まれる。幼稚園に入れば友達や先生との関係が深まり、病院へ行けば医師や看護師、習い事の場では仲間や指導者といったように、子どもが関わりをもつ他者は、いっそう広がりが増していく。

さらに、誰と関わるかに関しても、親とともにいる時間が長い発達初期ほど親の意向に依存しており、この点でも、場所から場所への移動、モノの導入・配置と同じ構図が成り立つことがわかる。小学校に入学し、学年が上がるにしたがって、気の合う友達と放課後に遊ぶ約束を自分たちで取り付けたり、気の合わない先生がいる塾へ行くのを拒んだりするようになる。こうして、成長にしたがい、誰と関わるか（あるいは関わらないか）は、当人の意思と選

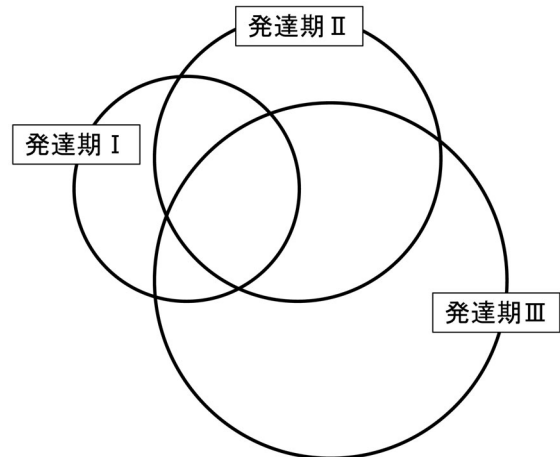


図1. 発達の移行にともなう生活世界の広がり

注：生活世界を構成する場所・モノ・ひとすべてにおいて、多かれ少なかれこのような構図が成り立つと考えられる。生涯発達のみにみれば、生活世界は拡大の一途をたどるわけではないが、ここでは、青年期ごろまでを想定しているため、徐々に生活世界が拡大することを反映した示し方がなされている（発達期が乳児期、発達期が児童期、発達期が青年期に相当すると考えると適当だろう）。円が重なりあっているところは、発達期をまたいで共通する生活世界（場所に関して言えば、“家”などがその代表である）を意味する。

択に委ねられていくこととなる。

以上に述べてきたことを簡略化して示したものが図1である。一般的に、われわれの生活世界は発達にともなって大きくダイナミックに変化し、その都度、新しい場所・モノ・ひとが組み入れられたり、反対に取り払われたりしながら、アップデートされつづけていく。そして、繰り返しになるが、幼い時ほど生活世界の取捨選択に果たす親の役割は大きい¹⁾。

さて、以上のことを踏まえ、ここからは、本稿のテーマである「親になること」をめぐる議論へと話を移していきたいのだが、筆者の見解を述べる前にまず、先行研究の議論を整理しておきたい。

4. これまでの親発達研究

子どもを産んで親となり、じっくりと時間をかけて育てあげる。われわれヒトの祖先は、この営みを数百万年にわたって連綿と繰り返してきた。一方、発達心理学の分野で「親になること」あるいは「親

であること」をめぐる問題に注目が集まりはじめたのはここ30年程度（わが国では20年程度）のことに過ぎない。かつて発達心理学の領域では、おとなになるまでが発達で、それ以降の時期は研究の視野にすら含まれていなかった。それが、生涯発達の視点の導入にともない、成人期や老年期にまで延長してひとの発達を理解しようとする動きが広がっていったのである。本稿が取り上げる「親になること」、「子どもを育てること」への関心も、こうした流れと連動して広がってきたわけである。

では、「親になること」をめぐる議論は、発達心理学の領域でどのように扱われてきただろうか。もっとも一般的なのは、親になったことでその人の意識や価値観にどのような変化がもたらされるかという問題だろう。たとえば、親発達の研究の草分けとされる柏木・若松（1994）では、3～5歳の子どもを持つ親を対象に質問紙調査が行われ、分析の結果、「柔軟さ」、「自己抑制」、「視野の広がり」、「運命・信仰・伝統の受容」、「生きがい・存在感」、「自己の強さ」の6つの側面での心理的成長が確認された。これらすべてにおいて男性より女性のほうが自覚的であった点も興味深い。他方、高橋・高橋（2009）は、否定的な側面まで含めて「親になること」をとらえるべきと主張し、「時間的余裕の喪失」、「行動の制約」といった面にも注目している。また、これら否定的な意識もまた、男性より女性のほうがおおむね顕著で、男性の場合は夫婦関係に対する満足度が低いほうが、また女性の場合は夫の育児参加が少ないほうが、否定的な変化を経験していたという。

男性に焦点化した研究も近年になって増えている。森下（2006）は、積極的に育児に関与し、子どもと遊んだり関わったりする頻度が高い男性ほど、肯定的な変化を自覚していたと報告している。また、小野寺・青木・小山（1998）は、子どもの誕生前（妊娠後期）から誕生後6ヵ月にかけての追跡調査を実施し、妊娠期において父親になる自信が高かった父親は、子どもの誕生後も父親としての自信が高く、育児に対する自己評価も高かったとしている。

「親になること」によって生じる意識の変化を「性役割観の顕在化」に特化して議論したものもある。小野寺・柏木（1997）は、妊娠期、子どもの誕生後2年目、3年目の3回にわたる追跡調査を行い、男性は、子どもの誕生後のほうが「一家を支えるのは自分だ」など伝統的な性役割観を強く意識することを明らかにした。海外の研究でも同様の報告は多

く（Cowan & Cowan, 2000 ; Katz-Wise, Priess, & Hyde, 2010）、ライフコース全体を通して、「親になること」ほどジェンダー化を生みやすい出来事はないという指摘すらある（Fox, 2010）。

第二に、「親になること」により、家族内外の他者との関係がどのように変化するか注目した研究がある。それらの多くは夫婦関係に着目しており、女性からみた夫婦関係満足度の低下を指摘するものが多い。すなわち妊娠期から出産後にかけて、男性の場合は満足度がほとんど変化しないのに対し、女性では著しく低下するのだという（Belsky & Kelly, 1984 ; Doss, Rhoades, Stanley, & Markman, 2009 ; 堀口, 2000 ; 佐々木, 2006 ; Shapiro, Gottman, & Carrere, 2000 ; Twenge, Campbell, & Foster, 2003 ; Wallace & Gotlib, 1990）。なお、小野寺（2005）によれば、子どもの出産後の夫婦関係の認知には個人差があり、妻の場合は夫の育児参加が少ないほど、他方、夫に関しては妻の苛立ちが強く自身の労働時間が長いほど、夫婦関係の満足度低下を強く感じるということがわかっている。

親になった人の実父母（つまり、生まれた子どもの祖父母）との関係や家族以外の他者との関係が大きく変化するという指摘もある。対人関係ネットワーク自体の構造が大きく変わり、とくに母親の場合、実父母との関係が親密化し、その反面、家族以外の他者との関係は希薄になりやすいと言われる（Belsky & Rovine, 1984 ; Bost, Cox, Burchinal, & Payne, 2002）。

第三に、「親になること」で経験される困難やストレスを本人がどう克服するか、あるいはどのように意味づけていくのかに着目した研究がある。氏家（1996）は、親になったことに不適応を示した3名の女性へのインタビュー分析から、物事の感じ方や考え方（現実知覚＝思考様式）に変化が起ることが困難を乗り越えるきっかけとなること、そうしたプロセス自体が「親になる」ことの一側面であること、を指摘した。また徳田（2004）は、「親であること」を各人がどのように意味づけ物語るかという視点で分析を行い、「自明で肯定的なものとしての子育て」、「成長課題としての子育て」、「小休止としての現在」、「個人的成長としての現在」、「模索される子育ての意味づけ」の5つの意味づけを見出している。松本・市川（2004）もまた、初めての子どもの誕生から約2年にわたる縦断的なインタビューを実施し、「親であること」によって何が経験され、

どのような意味づけられ方をするのかを質的に分析している。

5. 「親である人」はどのような生活世界を生きているか

本題に入りたい。以下では、本稿の前半で議論した生活・生態学的な視点を導入することで、「親になること」、「子育てをすること」がどのように捉えなおせるかを考えてみたい。「親になること」は、幼稚園や小学校への入園・入学のように年齢の枠組みによって定式化されているものではないが、広くは発達の人生移行の一つとらえてよいだろう。そして、子育てに多くの時間と労力を割くこととなる女性のほうがはるかに、「親になったこと」を機に生活時間、生活世界の大幅な構造的変化をはからねばなるまい。

まずもって、生活の拠点が家である以上、「親になった（なろうとしている）人」は、子どもを育てること、子どもが育っていくことに関連して、家の近くに何があり、どこへ行くのにどのようなアクセスの仕方があるかに大きな関心を寄せるであろう。自身の実家へのアクセスがよいこと、評判の良い小児科の病院が近いことなどが子育て期の人びとにとって住まい選びの重要な条件となるのはそのためである（筆者自身も第一子の誕生前に、さまざまな事情を考慮に入れて転居した経験がある）。治安がよく子どもを安心して育てられること、子どもがやがて通うことになる学校が近いことなども、住まい選びにおいて親が留意することの一つである。

では、子育てを始めたばかりのひとたちは、いったいどのようなところへ足を運び、誰と接しているのか。どういったモノを利用しながら「子どものいる生活・生態」を形づくっていくのか。筆者はここ数年、これらの問題に関し、データの収集と分析を行ってきた。調査協力者の母親たちに、毎日、日誌をつけてもらい、定期的なインタビューで補足情報を集めるというものである。一部、学会で成果発表を行ったり、学術雑誌に論文として掲載されたりしたものもあるので、以下にその概要を紹介したい。

(1) 「親になった人」の外出先と同行者

この研究では、第一子の出産を控えた女性に調査協力を依頼し、出産以後、子どもが2歳になるまで毎日、子どもと一緒に出かけたとこ、外出に際し

ての移動手段（徒歩、自動車、バス、地下鉄など）、誰が外出に同行したかを漏れなく記録してもらった。そのほか、来訪者、夫等に子どもを預けて母親が単独で外出したなどの情報も記録してもらった（小島、2013a）。

分析の結果、里帰りの有無に関係なく、出産からおよそ3~4カ月は外出の機会が少なく、産後4~6、7カ月頃にかけて、外出の頻度が急増することがわかった。さらに、外出先の分類を行ったところ、実家、買い物・銀行等、育児サークル、動物園・水族館等、図書館、外食、ママ友の家、病院・保健所、近所の公園など、10種類前後のカテゴリーに整理することができた。実家までの距離や自動車の運転の可否による個人差もあったが、全体としては、産後まもない時期ほど実家への訪問が多く、夫や父母（子どもにとっての祖父母）に同行してもらっての外出が多いことが明らかになった。育児サークルへの参加やママ友の家への訪問は、1歳半ごろから増えはじめ、夫等に子どもを預けて母親が単独で外出することは、子どもの2歳の誕生日の直前ごろに増える傾向が認められた。

以上から、母親になりたての人にとっては、「実家」への訪問が、子どもとの外出の“慣らし運転”のような役割を果たしていること、子どもがいるからこそ出かけるような場所が多数あること（育児サークル、動物園、近所の公園、保健所など）が明らかになった。残念ながら、出産前のデータがないため比較できないのだが、「親になる」という発達の移行を経て、その人の生活世界は大きく変わる（変えざるを得ない）と思われ、子どもが生まれる前には問題なく行けた場所（映画館、静かなレストランなど）に行けなくなるという話もインタビューで確認された。

(2) 「親になった人」のモノの利用

この研究も、上記と同様、第一子を出産した人の協力のもと、子育てに関連して買ったモノ（あるいはもらったモノ、借りたモノ）を漏れなく記録してもらった。総数1,000を超えるモノを10数個のカテゴリーに分類し、その内容にみる特徴や月齢に伴う変化を分析した（小島、2011）。

カテゴリーに関しては、栄養（飲食）、洗浄・除菌、清潔・衛生、病気への対処、温度管理、物理的的刺激（玩具、絵本等）、危険・けが防止、親の利便、行事・記念、情報収集などがあり、“生理的早産”

ともいわれる (Portmann, 1951 高木 1991) ヒト乳児の養育には大人の繊細な配慮が不可欠であることが示される結果となった。玩具はどの月齢においても、またいずれの協力者の記録においてもことさら多く、手を変え、品を変え、子どもに刺激を与えることが親にとって大きな関心事であることが示唆された。また、子どものためというより、親自身が楽をしたり親自身が楽しんだりすることに特化したモノがあり、月齢の進行とともにそれらが増えていく点も興味深かった。

6. 見えてきたこと

以上の分析結果からどのようなことが言えるだろうか。現時点での途中経過をまとめてみたい。

(1) 子ども本位の生活世界

もっとも特徴的だったのは、「親になった人」が生きる生活世界は、「子どものため」に特化している部分が多かった点である。一般に、親ではない(親になる以前の)人の生活世界は、本人主体である比重がたいへん大きい。自分の行きたい場所に行きたい時間に出かける、自分が欲しいものを手に入れる、会いたくない人には会わない。そういった判断は基本的にすべて本人に任されている。それに対して、親である人が出かけていく場所やそこで会おう人、そして使うモノや道具は、「子ども本位」であることに重きが置かれていた。場所に関していうなら、保健所や小児科の病院、育児サークル、動物園、公園への散歩がそうだし、モノでいうなら、(子ども向け)日焼け止めオイル、チャイルドゲート、おもちゃ、絵本などがこれに該当しよう。これらはすべて、子どもの健康や安全を保証し、なおかつ子どもにとって社会的、認知的な刺激を与えることを主要な目的とするものであった。

さらに、親がそのようにして作り出す生活世界は、多くが短期的あるいは長期的な時間的展望に基づいていた。図書館で定期的に開かれる読み聞かせの会に出席したり、育児サークルに出かけたりするのは、それが子どもの認知面や社会情緒面の発達にプラスにはたらくと親が考えているからにほかならない。子どもの健康に支障があるものを避けたり、ケガを防ぐための各種グッズを取りそろえたりするのも、同じことが背景にある。極端に言えば、親は、10年先、20年先のわが子をイメージし、遡っていま、

どのような生活世界を子どもに提供するのがベストかを考えていた。

考えてみるに、「親になること」を機に、自分の思いや欲求を棚上げにし、子ども本位の生活世界に比重を置くような習慣は、大昔にはなかったに違いない。森山・中江 (2002) は、絵巻物などの資料から中世の子どもの生活の様子を推測しているが、最大の特徴は、大人の生きる世界がほぼ完全に子どもに開かれていた点だと指摘する。これは逆に言えば、「子どものための生活世界」というものが存在しなかったことを意味する。現代のわが国では、子どもは大人によって設えられた「子ども向け」の世界を与えられ、その中で成長していくのだとみることができよう (小島・水野・富貴田・一木・矢野, 2013)。

(2) 「子ども本位」と「自分本位」の折り合い

ただし、「親になった者」が作り出す生活世界のすべてが、100%子ども本位に特化しているわけでもなかった。育児サークルや公園へ足を運ぶ主要な目的が、子どもに社会的な刺激を与えることにあるのはたしかだが、それと同時に、ママ友とのおしゃべりは親にとっても気持ちをリフレッシュする機会となる。同じ子育てサークルでも、知り合いが全くいないところよりも、気兼ねなくおしゃべりができる相手がいるところへの参加を、親は優先するだろう。これらはつまり、「子どものため」と「自分のため」のバランスを考え、両者の折り合いをつけるということが行われていることを意味する。

おもちゃにも同様の側面がある。根ヶ山 (2006) によれば、おもちゃをはじめモノには、母子間の物理的な距離を遠ざける作用があるという。筆者もかつて、自身の二人目の子どもが誕生したのち2年間にわたって、筆者夫婦と子どもたちが普段どの部屋にいて何をしているかを記録し、分析したことがある (小島, 2008)。結果は、筆者ら親と子どもが別々の部屋にいる際には、子どもは何か (おやつなど) を食べていたり、おもちゃで遊んでいたり、あるいはテレビを見ていたりすることが多いというものであった。おやつやおもちゃ、テレビなどは子どもにとっての刺激であると同時に、親が子どもから離れる契機ともなることがわかる。ただし、まず間違いなく、多くの親は、日がな一日子どもにテレビを見せることには難色を示す。そこでも「子どものため」と「自分のため」の折り合いをつける作業が行われているのであろう²⁾。

(3) 個人差

最後に、個人差の問題に触れておきたい。「親になった人」が出かける場所やそこで関わりあう人、使うモノには、協力者全体に共通する特徴が認められる反面、かなりの個人差もあった。きわめて頻繁に実家を訪れる人がいる一方で、出産から数ヶ月がたち生活が落ち着いてくると、実家にはほとんど足を運ばなくなる人もいた。毎日のように公園に出かける人、毎週、図書館に出かける人がいるかと思えば、そうした場所には一切出かけない人もいた。同じ日の午前と午後に、別々の育児サークルをはしごするような人もいた。その母親いわく、子どもが引っ込み思案なため、少しでもたくさんの社会的刺激を与えて社会的になってほしいと願っているということであった。子どものアトピーのことで悩んでいたある母親は、いろいろな保湿クリームを試しては効果を確かめるということをしていた。この人は、母乳を介して子どもの皮膚に症状があらわれることを避けようと自身の食生活にも気をつけていた。

以上のように、「親になった人」に起こる変化を生活・生態学的視点から理解するうえで、平均像を描きだすことと同時に、個人差にも言及することが必要と考える。住まいの地理的特性や個人の置かれたそれぞれの状況、また親の被養育経験やパーソナリティ、育児観、子どもの気質など、多種多様な変数がその人なりの生態を形づくっていることにも目を向ける必要があるだろう。

7. 今後の展望 さらなる展開に向けて

本稿では、「親になること」、「子どもを育てること」を発達の移行期の一つと位置付け、なおかつ、その移行を当人を取りまく生活世界の再構造化の過程と捉えなおす可能性を提示してきた。そこでは一貫して、「育てる側」の親を主体とした議論を展開してきたが、最後に「育てられる側」の子どもの問題、あるいは育てる親と育てられる子どもの生活・生態の交わりや分化といったことにも言及しておきたい。

かつて、子どもを取りまく家庭環境の構造理解を目指した Bradley (2004) は、「子どもの周りに広がる具体的なモノや場所と子どもの行為とがリンクし、そこに子ども自らが意味を紡ぎだしていくことが、やがては子ども自身の生活世界の形成につながっていく」と述べた。Bradley はまた、そうしたモノ

や場所と子どもの行為とを結びつける媒介を「アトラクター (attractor)」と呼び、親の信念や価値観、歴史・文化的な基盤に基づく社会化の目標をその典型とみなした。一方、Super & Harkness (1986) は、子どもが育つ場全体を「発達のニッチ (developmental niche)」と呼び、(1) (生活を取りまく) 物理的・社会的環境、(2) 文化的に規定された世話・養育の慣習、(3) 養育者の心理、の3つの要素からなるニッチが、子どもと文化をつなぐインターフェースの役割を果たすと指摘している。先の Bradley の見解と合わせて考えれば、(3) の養育者の心理 (のちに Super は、これを「親のエスノセオリー (parental ethnotheory)」と呼んでいる、Harkness & Super, 2006) や、その土台をなす(2)の世話・養育の慣習が(1)の具体的な物理的・社会的環境へとつながり、それが子どもの発達のニッチを形づくっていると言えよう。子どもは、このようにして親に設えてもらった場を (とりあえずの) 自分のニッチ (“居所”, “住処”と呼んでもよいかもしい) として位置付けていくのだといえる。

筆者は、子育ての究極の目標は子どもの社会化にあると考える。つまり、わが子が社会で適応的に生きていくのに必要な知識や価値観、あるいはそれらに基づく立ち振る舞い方を身に付けられるよう親が手助けする過程こそ、子育ての本質と考える。親は子どもよりはるかに長い年月を生き、多くの知識や適切な行動様式をすでに身に付けている。親子の間にあるそうした“非対称性”ゆえ、多くの親は、当面、自分のことを二の次にして、子どもの社会化を優先した生活世界 (子どもの立場からすれば、それが発達のニッチとなる) に重きを置くことになるのである。

ただ、以上のことをさらに長期的な視点で見るともう少し違った風景が浮かび上がってくる。子どもは、成長の過程でいつまでも親が提供するニッチを自分の住処にしつづけるのではない。親が「よかれ」と思って連れて行った場所に子どもが必ずしも馴染むとは限らない。「よかれ」と思って親が買い与えたおもちゃが当の子どもには全く気に入られないということもあるだろう。習い事や塾に通わせることは、子どもの将来を見越すことができる親にしてみれば「後になればきっとわかる」筋の通ったことだが、すべての子どもがそれをすんなりと受け入れるとは限らないし、成長とともにそうした親の態度に嫌気がさすようになっていくことは、古今東西どこ

にでもある話である。

やがて子どもは、親に与えられた洋服よりも自分で洋服を選びたいと思うだろうし、自分が読みたい本を自分の意思で手に入れたいと思うようになっていく。また、そういったことはすべて、子ども自らが主体的に自分のニッチを選び、形づくり始めていることを意味する。河野 (2011) は、「自分のニッチは受身的に与えられたり単に選択されたりするだけのものではなく、自分自身で作っていくものだ」と述べ、それを「鮮やかな主体」と表現した。この「鮮やかな主体」を前面に出し、親に反発したり自らの意思を押し通したりしながら、子どもは自分のニッチを作り出していくのである。

そして、同じことは親に関しても当てはまるかもしれない。仕事を辞めて育児中心の生活を送ってき

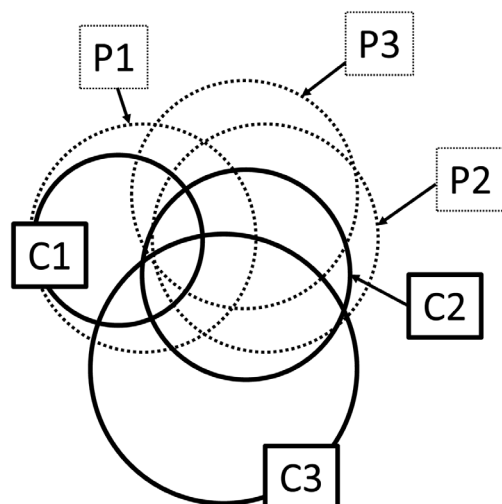


図2. 親の生活世界と子どもの生活世界の関係

注：C1～C3は子どもの生活世界を、P1～P3は親の生活世界を表す。C1とP1、C2とP2、C3とP3は同一の時期（例えば、C1 (P1) は子どもの乳児期、C2 (P2) は子どもの児童期、C3 (P3) は子どもの青年期に相当すると考えると適当だろう）を意味する。C1 (P1) の時期には、子どもの生活世界は親のそれに完全に包摂されているが、C2 (P2) の時期には両者の生活世界はかなりの程度重なり合いつつも、重なっていない部分も出現する。C3 (P3) になると、両者の生活世界は重なり合っていない部分のほうが大きくなる。図1にも示した通り、子どもの生活世界はこの時期、顕著に大きくなっていくと考えられるため、C1～C3にかけて徐々に円が大きくなるよう描かれている。この図は、子どもは子ども自らの生活世界を、親もまた子どもの成長にともない自分自らの生活世界を作り出していく様子を図式化して示している。本文ではこのプロセスを「同化」と「分化」という表現で説明した。

た女性が、いったん棚上げにしてきた「自分」を再度、前面に押し出し、改めて「自分なり」の生活世界を紡ぎだそうと考えるのは当然のなりゆきであろう。誰かに子どもを預けて自分の行きたいところへ出かけたり、社会的な活動に徐々に参加したりするようになっていくのはそのあらわれといえよう。

このように考えると、親（特に専業主婦の女性）と子の発達には、親が譲歩し子どもに合わせるような形で作られた生活世界を両者の一時的な身の置き処とし、やがて子どもの成長や子どもからの反発をきっかけに、互いに新たなニッチを展開していく、同化と分化のプロセスとみなせるのでみないか（図2）。そして、親子のニッチの分化は、親子が互いに物理的に離れたり、また近づいたりを繰り返すなかで徐々に進行していくのではないか。目下のところ、そのようなことを考えながら、新しい研究に取り組んでいるところである（小島, 2013b）。近い将来、これらのデータの分析結果も踏まえて、本稿に示した考えをいっそう洗練していくことができればと考えている。

先述の通り、親と子は圧倒的に“非対称”の立場にある。そのうえ親は、時間的展望（これはヒトに特有の能力と考えられる）に基づく将来の子どもイメージから遡及して、いまベストと考えられるニッチを子どもに提供しようとする。そのようなことが行われ始めたのは、それほど昔のことではないだろう。推測するに、そうした「子どもの世界」を大人が強く意識しはじめたのは、明治維新を機に義務教育制度が実現し、すべての子どもが小学校へ通うことが義務付けられて以後のことではないか。20世紀に入って子ども向けの商品（絵本、各種の玩具、お菓子など）が大量に生産され、子どもを意識した年中行事（クリスマス、誕生日など）が普及したこともこれに拍車をかけたものと思われる（野上, 2008；天童, 2004）。

いずれにせよ、いまの日本では「できるだけのことをしてやる」育児（柏木, 2008）が当たり前になっており、子どもはその世界で成長していくのが当然のような風潮にある。だが、先の本の中で柏木は、こうした育児はむしろ子どもの自立を阻害していると指摘し、男性であれ女性であれ、また親も一人の人間として「自分」を生きることを意識しなくてはならないと警告する。親と子は、結局のところ分離して、それぞれに「個」として生きていくのが宿命である。21世紀の子育てが今後どのようなようになって

いくのか、親と子がどのような関係を保ち生きていくのが適当なのか。生活・生態学的な視点は、これらのことに多くの示唆を与えてくれるのではないかと筆者は考えている。

脚注

- 1) かつて筆者は、子どもが通う幼稚園がどのようにして選ばれるのかを分析したことがあるが(小島, 2003), そこでも幼稚園を選ぶのは親であるという前提が浸透していた。これに対し, 大学の進路選択を行う主体は, すべてとは言わないまでも多くの場合, 当の本人であろう。
- 2) 場所やモノがもつこうした特徴を「多重性」と呼ぶことができよう(小島, 2011)。

引用文献

- Belsky, J., & Kelly, J. (1984) Transition to Parenthood: How a First Child Changes a Marriage, Why Some Couples Grow Closer and Others Apart, New York: Delacorte Press.
- Belsky, J., & Rovine, M. (1984) Social network contact, family support, and the transition to parenthood. *Journal of Marriage and Family*, 46, 455-462.
- Bost, K. K., Cox, M. J., Burchinal, M. R., & Payne, C. (2002) Structural and supportive changes in couples' family and friendship networks across the transition to parenthood. *Journal of Marriage and Family*, 64, 517-531.
- Bradley, R. H. (2004) Chaos, Culture, and Covariance Structures: A Dynamic Systems View of Children's Experiences at Home Parenting: Science & Practice. 4, 243-257.
- Cowan, C. P., & Cowan, P. (2000) When Partners Become Parents: The Big Life Change for Couples. Mahway, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Doss, B. D., Rhoades, G. K., Stanley, S. M., & Markman, H. J. (2009) The effect of the transition to parenthood on relationship quality: An 8-year prospective study. *Journal of Personality and Social Psychology*, 96, 106-119.
- Fox, B. (2010) When Couples Become Parents: The Creation of Gender in the Transition to Parenthood, Toronto: University of Toronto Press.
- Gibson, J. J. (1979) The ecological approach to visual perception. Boston: Houghton Mifflin Harcourt.
- (ギブソン, J. J. 古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻訳 (1986) 生態学的知覚論 ヒトの知覚世界を探る 東京:サイエンス社)
- Harkness, S., & Super, C. M. (2006) Themes and variations: Parental ethnotheories in Western cultures. In: K. H. Rubin & O. B. Chung (Eds.), Parenting Belief, Behaviors, and Parent-Child Relations (pp. 61-79). New York: Psychology Press.
- 長谷部比呂美 (2004) 保育者をめざす学生の幼保小連携に関する意識 「小1プロブレム」の背景要因についての自由記述から お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 1, 43-52.
- 堀口美智子 (2000) 「親への移行期」における夫婦関係 妊娠期夫婦と出産後夫婦の夫婦関係満足度の比較を中心に 生活社会科学研究, 7, 81-95.
- 柏木恵子 (2008) 子どもが育つ条件 家族心理学から考える 東京:岩波書店
- 柏木恵子・若松素子 (1994) 「親となる」ことによる人格発達:生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5, 72-83.
- Katz-Wise, S. L., Priess, H. A., & Hyde, J. S. (2010) Gender-role attitudes and behavior across the transition to parenthood. *Developmental Psychology*, 46, 18-28.
- 菊池知美 (2008) 幼稚園から小学校への移行に関する子どもと生態環境の相互調節過程の分析:移行期に問題行動が生じやすい子どもの追跡調査 発達心理学研究, 19, 25-35.
- 小島康生 (2003) 子どもの発達環境調整者としての親の役割とその心理的背景 幼稚園選びの分析を通して 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 3, 9-15.
- 小島康生 (2008) 家族ダイナミクスの視点からみた親が子から離れる行動 住居内での空間布置を手掛かりとした縦断的調査から 日本発達心理学会第19回大会発表論文集, 791.
- 小島康生 (2011) 子育て家庭におけるモノ環境の構造的な特徴 第一子の生後1年目における縦断的日誌調査から こども環境学研究, 7, 26-32.
- 小島康生 (2013a) 外出行動からみた子育ての実態 生後2年にわたる縦断的検討 日本発達心理学会第24回大会発表論文集, 614.
- 小島康生 (2013b) 日誌法による母子間の「離れる 近づく」の様態に関する研究 日本心理学会第77回大会発表論文集 (印刷中).
- 小島康生・水野里恵・富貴田智子・一木恒祐・矢野円郁 (2013) 乳児のいる家庭で親はどのような事故の対策を行っているか こども環境学研究, 9, 54-60.
- 河野哲也 (2011) エコロジカル・セルフ 京都:ナカニシヤ出版
- 松本寿昭・市川舞 (2004) 「母親になる」ということ:第1子を育児中の女性の事例から 大妻女子大学家政系研究紀要, 40, 105-112.
- 森下葉子 (2006) 父親になることによる発達とそれに関わる要因 発達心理学研究, 17, 182-192.
- 森山茂樹・中江和恵 (2002) 日本子ども史 東京:平凡社
- 根ヶ山光一 (2006) 子別れ としての子育て 東京: NHK 出版
- 野上暁 (2008) 子ども学その源流へ 日本人の子ども観はどう変わったか 東京:大月書店
- 小野寺敦子 (2005) 親になることにもなう夫婦関係の変化 発達心理学研究, 16, 15-25.
- 小野寺敦子・青木紀久代・小山真弓 (1998) 父親にな

- る意識の形成過程 発達心理学研究, 9, 121-130.
- 小野寺敦子・柏木恵子 (1997) 親意識の形成過程に関する縦断研究 発達研究, 12, 59-78.
- Portmann, A. (1951) Biologische Fragmentezueiner Lehre com Menschen Basel: Verlag Benno Schwabe Co. (ポルトマン, A. 高木正孝訳 (1991) 人間はどこまで動物か 新しい人間像のために 東京: 岩波書店)
- 佐々木くみ子 (2006) 親の人格的発達に影響を及ぼす諸要因 妊娠期から乳児期にかけて 母性衛生, 46, 580-587.
- 佐々木正人編 (2007) 包まれるヒト 環境の存在論 東京: 岩波書店
- Shapiro, A. F., Gottman, J. M., & Carrere, S. (2000) The baby and the marriage: Identifying factors that buffer against decline in marital satisfaction after the first baby arrives. *Journal of Family Psychology*, 14, 59-70.
- Super, C., & Harkness, S. (1986) The developmental niche: A conceptualization at the interface of child and culture. *International Journal of Behavioral Development*, 9, 545-569.
- 高橋道子・高橋真実 (2009) 親になることによる発達とそれに関わる要因 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 60, 209-218.
- 天童睦子 (2004) 育児戦略の社会学 育児雑誌の変容と再生産 京都: 世界思想社
- 徳田治子 (2004) ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ: 生涯発達の視点から 発達心理学研究, 15, 13-26.
- Twenge, J. M., Campbell, W. K., & Foster, C. A. (2003) Parenthood and marital satisfaction: A meta-analytic review. *Journal of Marriage and Family*, 65, 574-583.
- 氏家達夫 (1996) 親になるプロセス 東京: 金子書房
- Wallace, P. M., & Gotlib, I. H. (1990) Marital adjustment during the transition to parenthood: Stability and predictors of change. *Journal of Marriage and the Family*, 52, 21-29.
- Wicker, A. W. (1979) *An Introduction to Ecological Psychology*. CA: Wadsworth Inc. (安藤延男監訳 (1994) 生態学的心理学入門 福岡: 九州大学出版会)
- 山本多喜司 (1992) 人生移行とは何か 山本多喜司・ワップナー, S. (編著) 人生移行の発達心理学 第1章 (pp. 2-24) 京都: 北大路書房

(受理年月日 2013年9月25日)